

研究センターニュース第85号

巻頭エッセー

「風土」について考える

名古屋勤労市民生活協同組合
理事長 寺本康美

6月にコープ出版から賀川豊彦献身100年の記念事業の一つとして『友愛の政治経済学』が発行されました。この機会に、日頃お世話になっている方にこの本をお贈りして生協の原点を知っていただく一助にさせていただければ、と考え生協で30冊ほど購入しました。先日、内堀醸造の内堀信吾会長とお会いしたとき早速この本を贈呈したところ、そのお礼にということで2冊の本をご紹介いただきました。

それは和辻哲郎著『風土～人間学的考察』（岩波文庫）と柳生宗矩著『兵法家伝書』（岩波文庫）の2冊でした。これが（私にとっては）大変難解で、時間をかけてもなかなか読み進めません。後者の『兵法家伝書』は1632年に完成されたもので、『五輪書』とともに近世武道書の2大巨峰と言われています。今のところ私には内容がほとんど理解できていません。前者の『風土』は日本文化論の1つとして逸することのできない労作とされています。これまた読み解くことが大変で、書いてあることのどれほど理解できているか甚だ不安です。内堀さんからは「もう読みましたか？」と催促のメールが何度も届きます。読みました、と答えるのは簡単ですが、どう理解した？と問われるのが怖いのが本心です。内堀さんはメールのなかで「難解な本を読ませることは大変面白い」と言っておられます。私も小説なら週2、3冊ほどは読んでいますが、内堀さんはこのような難解な本を小説を読むがごとくお読みになるのだなと驚いています。頭脳と人格の違いかなと聞き直りつつ、解説に挑戦しています。

私があえてこの本のことを話題にしたのは「難解である」ことを言うためではありません。内堀さんは「『風土』を読み直してみ、改めて米を極めた新しい酢づくりをしたいと考え、砂糖を使わずに米の甘味を引き出す『すし酢』をつくりあげた」と意気揚々と語っておられたことを紹介したかったからです。詳しい商品の内容をお聞きしているわけではありませんが、その発想に敬服しています。ご承知のようにいま取り扱っているすし酢「祭りばやし」は米酢に砂糖、塩、昆布などを加えて味付けがされています。家庭ですし酢を作るときにも砂糖は必須であり、その配合加減がお寿司の味に大きく影響することは言うまでもないことです。その砂糖を使用せずすし酢をつくるというのですから画期的です。酢は「水と空気と微生物」によってその質が規定されますが、米そのものからも多様な味わいを生み出すことが可能になるようです。それが和辻が言うところの「東アジアモンスーン地帯の風土が生み出す人間存在のあり方」にもつながっているのかなどと考えさせられました。

「風土」では「この書のめざすところは人間存在の構造契機としての風土性を明らかにすることである。だからここでは自然環境がいかに関係を規定するかということが問題なのではない。たといここで風土的現象が絶えず問題とされているとしてもそれは主体的な人間存在の表現としてである。」「風土は、ある国土に根ざした民族においては、その風俗や生活の仕方の全体の姿において見出されるところの微妙な素質を作り出す。」とあります。このような記述が300ページにも及ぶ書の中身を、新しい酢づくりに結びつけている内堀さんが「もう読みましたか？」という問いに、「今後の生協のあり方についてもっと深く考えてみて下さいよ」というメッセージを重ねておられることにより気がついたこの頃です。

特定非営利活動法人
地域と協同の研究センター

第9回通常総会記念シンポジウム

「いま歴史に学び 協同組合の未来を拓く」

地域と協同の研究センターの第9回通常総会を記念するシンポジウム「いま歴史に学び、協同組合の未来を拓く」が7月4日、生協生活文化会館で開催されました。開会にあたりコーディネーターの研究センター常任理事である向井忍氏より、昨年9月のリーマンショック以来、さまざまところで危機が語られるなか、協同組合はいまをどう理解し、未来をどう描くかを検討してみたい。その際、生協などの種別を越えた協同組合のあり方として、ひととひととの“つながり”をつくるという、協同の主体としてのひとり一人の原点から考えることを大切にしたい、とシンポジウムでの目標が示され、講演・討論に入りました。以下、シンポジウムの大要を紹介します。



基調講演 イギリスの生協の再生に学ぶ

～社会的存在意義を訴える事業展開とは？

杉本 貴志（関西大学商学部）

関西大学の杉本と申します。私は大阪の関西大学にありますが、実は池下の生まれで、ここに来ましても何となく懐かしい思いが致します。協同組合の研究者は、愛知県出身が非常に多く、今日ここにおられる小木曾先生の他にも、広島大学の田中秀樹先生、仏教大学の鈴木勉先生、京都大学の若林靖永先生など、なぜか生協研究者は愛知県が多いようです。協同の土壌が愛知にはあるのかもしれませんが。

今日は、イギリスにおける生協の再生に学ぶというテーマでお話しますが、みなさんにとって面白くない話になるかも知れませんが、つまり、イギリス生まれ、ヨーロッパ生まれの生協は、現在では単なるスーパーであって、日本の生協はいろいろと問題はあっても、組合員がしっかりしていて、今さら何をイギリスの生協から学ぶのかと思われるかも知れません。しかしそれでもあえてイギリスの生協を取り上げることで、日本の将来への参考にしたしたいと思います。

まずイギリスの流通事情を紹介した上で、生協の「元祖」であるイギリスの協同組合、コープの「復活」について、地域や弱者への責任、社会的責任を強調したコープの事業展開から見てみることにします。しかし英国生協の「弱点」もありますので、組合員組織としての生協と社会的存在としての生協の2つの面からこの点を考えてみます。

1. イギリス流通業界とコープ

イギリスの流通は、驚くほどの寡占状態にあります。上位4社で消費の70%を占め、まさに「スーパーマーケット帝国」で、ここ数年で「Tesco帝国」といわれる事態になっています。

1993年に上位5社で40%だったのが、2000年には半

分を越えるまでになっています。Tescoは2007年4月には、日本にも上陸しましたね。大手スーパーの小売シェアは圧倒的で、現在、Tesco(29%)、Asda(15%、アメリカのウォルマートと資本提携)、Sainsbury(16%)、Morrisons(11%)と上位4社で7割のシェアを占めています(表1)。

表1 英国グロサリー市場におけるシェア(%)の推移

	1993	1995	1997	2000
Tesco	10.4	13.4	14.8	16.2
Sainsbury	12.1	12.2	12.4	11.5
Asda	6.5	7.2	8.3	9.5
Safeway	7.5	7.3	7.6	7.5
Sommerfield	4.3	4.2	3.8	5.0
5社合計	43.2	46.6	49.0	50.2

出典:『外資系流通業の研究2003—ウォルマート、テスコ、メトロの研究』(流通経済研究所、2002年)

イギリスは世界一、流通戦争が激しい国だといわれ、たしかに買収や乗っ取りは盛んなのです。2000年にあったSafeway、日本のイオンぐらいの規模ですが、今はなくなっています。それなら商品の品質が良くなり、物価は安くなるだろうと思うのですが、そうではないのです。ティッシュペーパーが1箱600円とか、歯ブラシが1本800円もするとかいった具合です。それでも最近では、ポンドが高くなって、日本人から見ると少し値段が下がっているようです。

しかもイギリスのスーパーでは、日本でいうトップバリュとかコープ商品のようなPB商品(スーパーが自社開発したプライベート商品)が中心で、なかには売っているのは

100%PB商品というスーパーもあります。

イギリス人はそこで買い物するわけですから、みんなが同じものを食べ、みんなが同じものを着ている。個性的と思われているイギリス人の消費生活は、実際には驚くほど画一的になっています。かつて強かったコープが弱体化して、流通業者がやりたい放題だといってよいでしょう。Tescoの顧客であれば、冷蔵庫のなかはすべてTesco製品です。実際にTesco製品だけでも満足できる。100%のオレンジ・ジュースも、濃縮果汁還元、絞りたて、つぶつぶいり、つぶなし、オーガニックのジュース、フェアトレード品など各種揃っています。貧しい人向けには信じられなくらい安い100%ジュースがあり、長期保存が可能なものもあります。100%ジュースだけで、品質にこだわる人向けから低価格品まで、10種類以上を揃えているのです。



これだけスーパーが強力ですから、まちやむらの個人商店は壊滅状態です。商店街の衰退は日本でも同じでしょうが、それよりもっとひどい。

我々のイメージで言うと、完全にアメリカ型の生活スタイルになっています。消費者は、週に1度、土曜日から日曜日、クルマで郊外のショッピングセンターやスーパーストアへ出かけ、大量のまとめ買いをします。レジを通過するのに1人で数分かかるといった状態です。

残っているまちの商店街も様変わりし、驚くほど画一化している。イギリスのどこの地方都市に行っても、同じ名前の店が並び、商店街の写真を見てもどこの町の商店街か分からないほどです。全国チェーンの専門店が席捲しており、個人商店はどんどんなくなっています。どこに住んでいても買う店は同じで、ドラッグストアはブーツ、本屋はウオーター・ストーンズ、スポーツ用品はJD、雑誌・文房具はWHスミスといった具合です。大都会ロンドンとは別ですが、その他の街なら、普通の日本人旅行客が一ヶ月滞在していても、これ以外の店に行くことはほとんどありえないのではないのでしょうか。

そんななかでコープは、1844年に誕生したロッチデール公正先駆者組合を受け継ぐ生協の「元祖」にふさわしく、かつては流通業のトップランナーでした。イギリスでは先駆けとなったチェーンストア展開で圧倒的なシェアを実現し、セルフサービス方式なども生協が率先して導入しました。バーチャル著『コープ:ピープルズ・ビジネス』では、第1次大戦前後、コープは「バター市場の40%、牛乳の26%、一般食料雑貨品(グロサリー)の23%、茶や砂糖やチーズの20%、パンの16%、肉の10%」の市場シェアを獲得していたと述べています。イオンとユニーとセブンイレブンとローソンとサークルKとを全

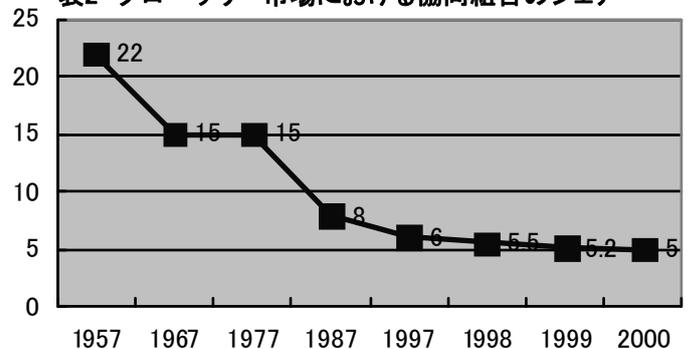
部合わせたくらいのシェアです。しかし、第二次世界戦後、これが没落し、シェアは低下する一方で、コープは巨大スーパーとの戦いで苦戦し、敗れていきます。20世紀後半まで、一貫してコープのシェアは低下し続けました(表2)。

しかも1997年、コープは乗っ取り騒動に巻き込まれ、崩壊の危機に瀕しました。日本生協連にあたるイギリスの中心的な連合会、CWSが無くなりかけたのです。乗っ取り屋がCWSを乗っ取ろうとCWSの内部に産業スパイを送り込み、CWSの内部情報を入手しようとした。総会で生協を株式会社に転換し、これに乗っ取ろうと目論んだのです。コープは内部情報がつつぬけであることに気づき、私立探偵を雇ってスパイ行為の決定的場面の撮影に成功し、これを裁判所に提出しました。その結果、これは違法な買収だという裁判所の中止命令が出て、買収計画公表の一步手前でイギリスの生協運動はなんとか崩壊を免れました。

これはつまり、イギリスの生協は「協同」の事業であることの意味を失っていたということです。もし株式会社への転換の可否を組合員投票にかけていたら、結果はどうなっていたかわかりません。なぜなら、営利企業への転換によって、組合員だった人には“たなぼた(windfall)”で利益が手に入るからです。株式会社に転換すれば儲かる、という組合員が大勢いたと思われます。日本でも、共済生協が保険会社に転換することがありましたが、イギリスではこの時期に多くの相互扶助会社が保険会社に転換しています。協同組合であれば組合財産の分割は不可能ですが、株式会社であれば分割して処分し、組合が蓄積してきた財産を山分けすることができます。一攫千金を考えた組合員は、それをねらっていました。裁判所の命令がなければ、イギリスのコープは株式会社に転換していたかも知れません。

日本の生協と違って、イギリスやヨーロッパの生協店舗は、一般消費者が利用できる、いわば普通の店なのです。日本では生協法で組合員以外の利用を制限していますし、強力な共同購入や個配があり、組合員でないと利用できないのですが、このような制限があるのは、世

表2 グローサリー市場における協同組合のシェア



出典: *The Co-operative Advantage: Creating a Successful Family of Co-operative Businesses* (The Report of the Co-operative Commission, January 2001)

界中で日本の生協くらいです。それだけに、イギリスなどの生協は、自分たちが普通のスーパーマーケットとどう違うのか、組合員や社会に示すのに苦労するのです。

ところが21世紀に入って、このコープが没落に歯止めをかけ、むしろ今は躍進を始めているという事態が生まれています。それはなぜなのか？ 何がコープを救ったのでしょうか？ それは、コープ陣営が大手チェーンにはない特色を打ち出すことに成功したということだと、私は考えています。

具体的には、「社会的責任」というものを前面に打ち出すことによって、コープ独自の存在意義をアピールし、消費者から支持されることで、生協は没落から反攻に転じようとしています。

2. コープの社会的責任経営

(1) ガバナンス改革

まずコープが着手したのはガバナンス改革でした。組合の運営の仕方を変えたのです。90年代、イギリスでは企業不祥事が続発しました。そこで一般企業のなかで企業の運営・統治方法を改善しようというコーポレート・ガバナンスの議論がおこり、そこで出てきたのが「キャドバリー委員会報告書」でした。委員会は営利企業に対して、不祥事を起こさないガバナンスを要求しました。こうして一般企業でのガバナンス改革がすすむなか、生協でも、これは株式会社だけの問題ではないとして、ガバナンスの議論が起こったのです。協同組合連合会で「最善行動規範」が定められ、各生協にも年一度の点検・報告・改善を求めることになりました。通常の事業報告書のほか、利害関係者（ステークホルダー）や、社会に対する責任を明らかにする「社会的責任報告書」の作成が義務づけられます。

イギリスの生協界から始まり、ヨーロッパにおける協同組合ガバナンスの議論、ICA（国際協同組合同盟）のガバナンス議論を経て、日本の生協や農協にもガバナンス論が広まります。日本生協連の「健全な機関運営のために」、コープこうべの「総合評価」、大阪いずみ市民生協の「社会的責任報告書」などが、こうした流れのなかから出てきます。生協では、まだ環境報告書というタイトルの報告書が出されることが多いと思いますが、そこからもう少し問題意識を幅広くして、社会的責任報告という概念が生協界にも広まりつつあるのです。

(2) 事業改革

90年代～21世紀初め、イギリスの生協では、まずガバナンス改革が行われ、社会的責任経営に乗りだしたのですが、それに続いて、「ものを売る」という面での社会的責任の追求、つまり事業の改革に手が着けられました。生協のあるべき「売り方」を考える、また「売るもの」を考える、というものです。巨大スーパーでは不可能

な売り方で、巨大スーパーでは売っていないものを売ること、社会的責任を果たす努力が生協ですすめられます。



1) いかにか売るか？

コープが打ちだしたのは、われわれはコミュニティリテラシー、つまり地域のなかの店として、地域、コミュニティに貢献する店であろうということです。スーパーストア（超大型店舗）を出店することは止めて、車を運転できないとか、車が買えないといった「買い物弱者」に貢献する、コンビニエンスストアを中心とした小型店戦略に転換したのです。日本ではコンビニというと若者向けの店のイメージがありますが、イギリスのコンビニは、おじいさんとかおばあさんが利用しやすい、小さなスーパーとなっています。

イギリスで地域社会の核になるのは「教会＋パブ＋郵便局」の3点セットです。イギリスの郵便局というのは、雑貨や一部食料品なども売っていて、何でも屋として地域住民に愛される存在です。ところが日本と同じく、郵政合理化で現在どんどんポストオフィスの閉鎖が続いています。今日もイギリスのマスコミには、ポストオフィスの民営化がどうなるといったニュースが大きく出ていました。

そこで生協では、自分たちがつくるコンビニエンスストアに、ポストオフィスを併設しようという動きを展開しています。表に示したのがイギリスの生協がもっている店舗数（表3）ですが、スーパーストアは2001年の27から2005年には23に減っています。ところがコンビニエンスストアは同時期に1100から2200へ、ポストオフィス型店舗は270から513へ増えているのです。テスコと正面から対決するのではなく、そうした大型店戦線からは撤退し、小型店に活路を見出そうとしているのがイギリスのコープなのです。

表3 イギリス全土のコープのタイプ別店舗合計数

	2001	2005
Total Food	2383	3301
Superstores	27	23
Supermarket	1233	1089
Convenience	1109	2176
Others	14	13
Total Non Food	1200	1236
Travel	658	695
Post Offices	270	513
Others	332	586

出典：Consumer Co-operatives Performance Review 2002, Co-operatives UK, 2003.

Connecting the Co-operative Movement: Performance and Statistical Review 2005, Co-operatives UK, 2006

イギリスでは日本と違って、コンビニエンスストアの「深夜」営業は防犯の砦ともなっています。一般の商店が17時半にはほぼすべて閉店してしまうなかで、コープのコンビニだけは夜10時まで営業しているのですが、不良少年へは厳しい姿勢を取り、たとえば彼らの象徴的ファッションであるフードと野球帽をかぶった格好では、コープの店には入れません。大型店では競争に破れ、撤退を強いられたコープですが、それを逆手にとって、コミュニティリテイナー(地域の店)として独自の存在意義をアピールしているということです。

なお環境問題への取り組みでも、イギリス社会が国際標準から大きく遅れているなか、コープはそれなりに頑張っているという印象があります。コープのレジ袋は、1年半後に劣



コープのコンビニエンスストア

化し始め、3年で粉々分解する生分解プラスチックで作られており、日本でいうエコバッグもユニークなものが開発されています。

協同組合原則第7原則は「コミュニティへの関与」の原則といわれます。協同組合は、組合員によって承認された政策を通じて、コミュニティの持続可能な発展のために活動するというものですが、イギリスのコープはこれに従って、「売り方」でもコープならではの存在意義を強調している、と見る事ができるでしょう。

2)何を売るか？

コープは、地域密着の小型店を展開するだけでなく、そこで売る商品にも倫理的なこだわりを見せています。それは、イギリス人の考えるモラルに反する生産方法をとる企業によって作られた製品は売らないということです。例えば、アニマル・ウエルフェア(動物福祉)に反する生産物、製品は売らないことにしています。動物の権利を強調するコープのレジ袋には、動物実験をして開発された商品は売りませんと書いてあります。こうしてコープでは動物実験をしてつくった化粧品は一切売らえていないのですが、その他食料品でも、イルカにやさしいコープのツナ缶というのがあります。生協では、イルカの生態に配慮した漁獲法で獲ったマグロしか使っていないことを証明した「ドルフィンサーフ」のマークがついていないと、マグロの缶詰を売れないのです。マグロを捕るのに大きな網でとるとイルカと一緒に捕れてしまうので、そうしたイルカを傷つけるような漁獲方法ではない方法で捕ったことを公的機関が証明するのです。また、ニワトリにやさしいコープのたまごというのは、ニワトリをケージで育てることをせず、放し飼いをしているということで、こういう卵を「フリーレンジ・エッグ」といっています。いまコープで売られている卵は、これが100%近いと思います。

ニワトリにやさしいコープのたまご



イルカにやさしいコープのツナ缶



これは「ニワトリが喜ぶ」とか、「ジェイミーが喜ぶ(ジェイミー・オリバーという国民的人気のあるシェフがニワトリにやさしくしようとテレビで訴えたために、フリーレンジが爆発的に普及したのです)」というだけの話ではないと思います。

英国社会で事業展開をする上での社会的責任を果たすことの重要性を考え、消費者の共感と生産者との精神的連帯を大事にする。そんな事業をみんなが一体となってつくりあげることによって、「食」のあり方を考えるきっかけともなっている。大袈裟に言えば、そういうことも言えるのではないかと私は考えています。

3)フェアトレード

生協がつくる銀行＝コープ銀行の融資基準では、児童労働を使っている企業への融資を拒否することなどが列挙されていますが、生協界ではそれと同時に第三世界の生産者へも関心を寄せ、フェアトレードへの取り組みが大々的になされています。フェアトレード＝公正貿易というのは、「公正な価格」で輸入しようという運動です。

第三世界の生産者が生産物と家族の生活を再生産することが可能な価格を保障する貿易をしようという考えで、たとえばコーヒー生産者の子どもたちが貧しくて学校にも行けないような価格でコーヒー豆を輸入するというのはおかしいのではないかと、この主張にもとづく貿易です。



フェアトレード認証マーク

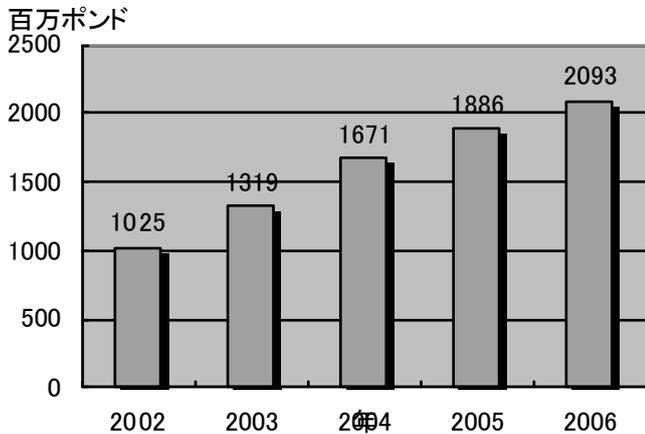
イギリスの生協はこれに大々的に取り組んでいます。この製品は間違いなくフェアトレードで輸入されたことを認証するマークが付いた商品を購入することで第三世界への支援になると消費者に呼びかけ、いまイギリスでは、コープは何よりもフェアトレード・ナンバーワン企業として有名です。コープの影響で、3月のフェアトレード週間には町中にフェアトレードの話題があふれます。この時期、マスコミは必ずコープを記事に取り上げ、各種フェアトレ

ード商品を紹介するのです。コープでは、チョコレートは全品フェアトレード・チョコレートに切り替えましたし、フェアトレード・ワインなども注目されています。エコバッグもフェアトレード・エコバッグをイギリスで初めて開発しました。素材がフェアトレード・コットンでできているエコバッグで、環境問題だけでなく、第三世界の問題をエコバッグとして掲げたわけです。

商品展開以外のキャンペーン活動もコープは展開しています。「フェアトレード・タウン」宣言というのは、地域がこぞってフェアトレードを推進するという宣言で、たとえば市役所で出す紅茶・コーヒーはすべてフェアトレード製品にするとか、いくつかの条件をクリアすると、地方自治体がこの宣言をすることができるのです。コープやその組合員は、その先頭に立って、この運動を全国に広げました。こうして、イギリスにおけるフェアトレードは、大学にも、公共施設にも、鉄道の車内販売にさえも、急速にひろがり、社会全体でフェアトレードが認知・普及されていくなかで、コープへの注目・評価も高まっていったのです。

イギリスの流通雑誌『グロウサー』(Grocer.24 June 2006)の調査では、「環境に優しい」「地域社会にだけ込んでいる」「倫理的である」の3つのアンケート項目すべてでコープが全小売業者中トップを獲得しました。こうしたイメージ確立で、コープの復活、再生、逆襲が始まっています(表4)。

表4 倫理的な地域の店として復活したコープ ユナイテッド・コープの事業高



出典: ユナイテッド・コープ年次事業報告書

いまやイギリスでは、コープ以外にも専門店、チャリティショップ、スーパーマーケットなどで、フェアトレード製品の入手は極めて容易になっています。個人商店が壊滅しているにもかかわらず、フェアトレード専門ショップやボランティア団体が運営するチャリティショップは、どの町にもあるような存在になっています。

スーパーで売られているフェアトレード・バナナが2パックで約360円ですから、価格がそれほど高くないというのも普及の一因でしょう。

こうして、コープはイギリスの商業を変えることを通して、社会のあり方を変える道歩んでいます。日本の生協の独自の取り組みである「自立支援型」フェアトレード(民衆交易)などと比べると、運動としての「質」は日本の方が上ともいえますが、「量」的規模の上ではイギリスのコープの方が遙かに上で、それが社会的インパクトを与える結果となっているといえます。しかもそれが結果的に事業的成功に結びついたという点で、イギリスのコープの倫理的事業の展開は、大いに参考になるものでしょう。

残念ながら、先ほどこの会場の1階にある生協のお店でコーヒーとチョコレートを見てみましたが、フェアトレード商品は見つけれませんでした。イギリスとは、ぜんぜん違うんですね。ただ、日本には「産直」があり、こえは国内フェアトレードのようなもので、生産者のことをきちんと考える消費という点で、フェアトレードとは共通点があるといえると思います。

3. “生協らしさ”と社会的責任

イギリスの生協にもたしかに単純に賞賛できない側面がありますが、彼らは「消費者の利益だけを追求すればいいのか？」を問いかけています。歴史を振り返れば、もともと生協は「消費者団体」ではありません。ロッチデールの原点は、消費者主権の世界をつくらうとしたことにあるのではなく、ロバート・オウエンの考えに基づき、競争社会に代わる協同社会を建設することが目標でした。協同の店は、そのための第一歩だったのです。消費の部分から協同を始め、資金が貯まったら協同の生産も始めよう、そして社会全体を変えていこう、と彼らは考えたわけです。したがって、彼らは当初、組合労働者(従業員)に対する利潤分配制を採用していました。生協で上がった利益を消費者の間だけで分配していたわけではないのです。そのほか、協同の住宅建設なども行っています。

ところが時代とともに生協は変質します。組合員の利益を追求する生協は、消費の場面のための「協同」になり、さらに買い物をすれば割戻金(devi)が貯まるということで人気を集めると、その貯金だけを目当てにした人達の生協、貯蓄機関のような生協になっていきました。

イギリスのコープ陣営は、いま倫理的経営を強調することで、もう一度その社会的存在意義をアピールしました。生協は「買い物することが社会貢献」になるのだと訴えています。コープの組合員カードと、それを真似してテスコなどスーパーが採用したポイントカードとは似ていますが、スーパーにはない、生協らしさの追求です。

社会を良くしていくために活動することをあきらめるのではなく、「消費」から社会を変えていこうとする。消費者に、そういう機会を与えるのが生協の使命だと考えてみてはどうでしょうか。

格差社会の中で生協には何が出来るのか？ 消費者のために、というだけであれば、リストラをして、安くして、消費者に喜んでもらう、そえだけでいいのかもしれない。しかし、果たしてそれでいいのか。そんな路線とは違った、あたらしい「非営利・協同」の事業展開を示せないのか。しかも、イギリスのコープにはない(足りない)、日本の生協独自の「強み」を活かした展開が出来ないでしょうか。日本の生協には、組合員組織があります。

良心的な小売事業者としての評価は確立しましたが、イギリスでは、「組合員組織」としてのコープの復活はこれからという段階です。以前、私は個人的に、イギリスのコープで組合員になりたいという申し出をしたのですが、それが理解されなかったという経験があります。店員が組合員制度があることを知らなかったのです。その店舗で、いまは生協への加入を呼びかけるようになっています。今後、イギリスのコープが「良心的スーパー」という以

上のものを示せるかどうか。コープの店では、組合員カード提示も“復活”しましたが、大規模合併と全国統一で、コープがますます組合員から離れる危険もあります。テスコ等一般スーパーでも会員カード制が普及していますが、それ以上の意味を持つ「組合員組織」のあり方を示すことが英国生協の課題です。

しかし、日本にはすでにその組合員制度が整備されている・・・私は密かにそれに期待しております。

未来を切り拓くために、協同組合の原点を探り、学ぶ

みかわ市民生活協同組合
理事長 八木 憲一郎

1. はじめに

みかわ市民生協の八木ともうします。杉本先生のお話をうかがい、心地良いカルチャーショックを受けており、そのショックに浸っている方がいいなという気がしております。ともうしますのは、私、はじめてヨーロッパの生協を訪問したのは1981年ですが、丁度、イギリスの生協の小売シェアが14%から一気に7%くらいにまで落ち込んだ時期でもありました。7%でもすごいと思ったわけですが、半分になってしまっていたわけです。そのときの訪問先では、安全、安心とか、社会的役割とかいったことは何も聞けなくて、むしろ、その生協の理事のみなさんからは、「今年は出資配当ができました」と胸を張っての報告でした。当然、組合員とか、組合員組織という話も出ませんし、店舗レジの若い職員に員外利用について尋ねてもチンプンカンプンで要領を得ない、あなたは組合員ですかと尋ねても、「私は、仕事をするにあたって、組合員になれと言われたこともない」という回答が返ってきて、同じ生協といっても、目的とか、運営とか、社会的な価値観とか、ずいぶん日本とは違うなという印象をもって帰ってきました。その後、21世紀になってコンビニが成功したとか、フェアトレードが活発に展開されているとかは断片的に聞いていましたが 今日のお話を聞いて全体的な理解ができたわけですが、そうした現象的なことではなく、より深く足元に横たわっていることをもう一度見つめ直してみることに価値がある

なと思いました。杉本先生は最後に「日本にはすでにある…」と言われましたが、「…」となっていることがミソでしょうか、私には「あるはず…」と理解してしまうわけで、あらためてやらないといけないという必要性に確信をもちました。

私は、生協で仕事をしている実務者ですので探り、学ぶだけでなく、そこから実践に繋げることをどうするか、そんなことも考えることができたと思います。



2. (生活)協同組合の歴史から学びとりたい、学び続けたいこと

みかわ市民生協は今年創立35周年を迎えましたが、創立当時は、先輩、生協ではめいきん生協の実践や政策に教えられ、毎週名古屋に来ていろいろお話を聞いて、商品をトラックに積んで帰り、翌日は共同購入するというをやっていました。先輩生協から学んだことは、いろいろあります。平凡ですが“よりよい品をよりやすく”をかかげました。組合員に対する使命と同時に、社会が変わっていくことが大切だと考え取り組んでまいりました。生協であれば“平和とよりよい生活のために”というスローガンをどこでも掲げますが、みかわ市民生協では“よりよい生活と平和のために”と逆転していて、これは

私がどこかで聞き間違えてきて、それが定着してしまったようで、トラックにもずっとこう書かれていました。その後、制限速度内走行車という表示もトラックにつきましたが、CIS ということ COOP のマークと赤い線を必ず付けないといけない、それ以外の余分な文字は消すよというので、この価値ある文言が知らない間に消されてしまっているといったこともありました。今日でも、平和とよりよき生活のためと言うことが、私たちの運動や事業を貫く核心になっています。「一人は万人のために万人は一人のために」というスローガンもあります。

最近では“自立と協同”ということが言われますが、創立のころは“協同と連帯”がすごく魅力的な言葉でしたし、その実践を通し協同する仲間が増えていくことを実感しました。

1966年のICA ウィーン大会で決定された6つの協同組合原則を各職場にかかけ、職員の昇任試験にも必ず出るというように、お互いに学び合ってきました。1980年にICA のモスクワ大会が開かれ、レイドロウさんの報告がありました。丁度翌年に、先に言いましたようにイギリスに行ったわけですが、その時、「西暦2000年における協同組合」について、イギリスではどのように議論していますかと尋ねたところ、「それは何ですか？」と問われ、私たちは、一所懸命勉強しなくてはとやっていたものですから驚きました。それからすでに30年近くになるわけですが、この報告の中で指摘されている内容について、今日的にますます大きな意味と必要性があると感じています。とくに第V章では、協同組合は将来どのような方向に踏み出していったらいいかということで、4つの優先分野が示されていました。このなかで第1の優先分野は、農協や漁協や生協が一緒になって世界の飢えを満たすのだという大変わかりやすいメッセージでした。しかし、第3の社会の保護者をめざすとか、第4の協同組合地域社会の建設などについては、当時の私(たち)にはまったく理解できないことでした。協同組合の社会的役割といった私たちの理解を超えるものであったと思います。社会の保護者という点では、今日、貧困や雇用などに生協がどのように関わられるかという問題に直

(注) 1980年ICAモスクワ大会のレイドロウ報告
『西暦2000年における協同組合』目次より

第三章 協同組合の理論と実践

第四章 協同組合の活動とその問題点

第五章 将来の選択・・・4つの優先分野

第1優先分野: 世界の飢えを満たす協同組合

第2優先分野: 生産的労働のための協同組合

第3優先分野: 社会の保護者をめざす協同

第4優先分野: 協同組合地域社会の建設

(コミュニティネットワークをつくるための協同組合)

第六章 主要な論点と重要な質問

面しておりますし、協同組合地域社会は、みかわ市民生協でいえば、協同のあるまちづくりというテーマそのものだと思っており、こういうことが出来るか出来ないかが、21世紀に協同組合が、生協が、みかわ市民生協が、地域に必要とされるかどうか試される中味だろうと、ここ5年10年議論をしています。

1980年にこの報告が出たときには、内容が悲観的過ぎると感じました。79年から80年のヨーロッパの協同組合を中心に分析して書いたレポートだそうですが、「日本の生協は、そうではないぞ」という気持ちが強くありましたが、しかし同時に、読めば読むほど腹に染み渡ってくるといいますか、時間が経つほどに、そういった感じが強くなってきました。みかわ市民生協では、90年代の半ばから現在まで、「西暦2000年の協同組合」をテキストにして学習会を続けていますが、私の持っている本は誤訳が多く、その後、新しく出版されました。しかし、今では絶版になってしまい、海賊版をつくって専従の中で勉強してきました。

今日、杉本先生のお話を聞いていて感じましたが、あのときイギリスの生協はこんなガタガタなんだと感じ、逆に日本の生協には組合員組織があり、専従教育も熱心にやっている、大学生協からの人材も豊富にあって、日本の生協には展望があるなと思いました。しかし、今日イギリスの生協のお話を聞き、それとは逆に、まだまだ私たちもやらないといけないことが沢山あると気づかされたわけです。

90年代に入ってから21世紀になるまでの間に、ICAの声明が出て、日本の生協の理念やビジョンがまとまり、全国の生協のなかでもどう地域社会に貢献するのかといったことが言われ、実践もすすんできていますが、やっぱりまだまだやることが沢山あるし、考え討論することが山ほどあるなと実感しているところです。

そんななかで、賀川豊彦献身100年という節目の年であるということを含め、あらゆる意味で生協をもう一回振り返ってみることが大切だと思っています。みかわ市民生協の創立35年を振り返ってみる。そして、めいきん生協と新しい生協を作ろうと取り組んでいます。これまでの35年の経験の中から一つでも、二つでも拾い上げていく作業が、今こそ必要ではないかと思っております。

3. あいちの新しい生協がめざすこと (合併の目的)

あいちの新しい生協をつくらうということで、臨時総代会の日程も決め、それに向かって努力していこうとしているところですが、やはり歴史、理念、原則を学び、学んだことを実践に生かしていくことが大事だなと思っています。

合併の目的やめざすこと、言うなれば、「何のために合併するのか」を改めて問いなおしていく段階に来ていると実感しています。それをみかわ市民生協的に翻訳

すると、次の3つにまとめられると思います。第1は、組合員の協同の力がもう一回りも二回りも大きくなって、くらしの願いが実現できるような生協を愛知県につくろうということです。第2は、愛知県の隅々、それぞれの地域地域に、そして高齢化・過疎化が進んでいる三河山間地にも、協同の輪が広がり、くらしや健康を守る運動・事業のしっかりした生協を愛知県につくるということです。まだまだ愛知県内の組織率は低いですが、三河の山間地の組織率は25%位あって高いんですね。次に、第3ですが、組合員の組織と事業が発展するように、組合員の力・役職員の力が発揮できる生協が愛知県に育つように、ぜひ合併しましょうということで、そんな話し合いをしているところです。

1844年、ロッヂデールに初めて成功した生協が生まれ、それから160年が経つわけですが、たくさんの成功

と失敗の経験があるわけですので、そのどちらも活かしていくことが大事なことだと思っています。そんな意味で、今日のお話では、イギリスの生協も失敗し、その中から新しいものをつくりだしてきたということは、私たちの教訓にもなるわけで、協同組合の原点、原則を学びながら、実践を深めていきたいと考えているところです。



お二人の講演と報告をうけて

研究センター常任理事
 小木曾洋司(中京大学現代社会学部)



今日の杉本先生のお話から、あらためて生協とは事業体であるとともに運動体でもあるということを強く感じました。イギリスの生協のフェアトレードなどがわかりやすい例ですが、イギリスの流通事情の流れによって生み出された「買い物弱者」に貢献するコンビニという販売形態の追求など、

事業そのものが新しい社会の考え方や仕組みの創造に深く関わった運動でもあることがわかります。それを再生というか、再出発というかはおきますが、日本の生協はそうした役割を組合員活動という形から得ていることをまず確認したいと思います。組合員活動は事業組織であり、運動体でもあり、近隣関係でもあったわけです。そうした構造の特長を今後の方向を考えると自覚しておきたい。また実際、現代が社会の亀裂を深めている状況のもとで、そのような構造が要請されざるをえなくなっています。イギリスの生協が社会的責任を事業経営の核として新しい暮らしをひろげる役割を持っているという感想をもちました。

私は地域社会の研究をしていますので、八木理事長さんのお話をうかがっていて「協同組合地域社会」とか、「地域社会への貢献」とか、京都の研究所の総会では「生協の地域化」など、いろいろな表現が出てくるのですが、それがたいへん気になりました。それぞれ何を考えておられるのか内容についてさらに教えを請いたく思います。

生協の合併という点に関していえば、過疎が進む中山間地での暮らしなどを考えますと、生協の合併によって中山間地と都市部の新しいつながりが生み出される可能性ができてくるのかもしれないなどと考えます。ですから合併によってどんな新しい質の関係づくりを構想するのか、それが具体化されると地域づくりのなかでの新しい協同組合の展開が見えてくるのではないかと思います。

少子高齢化、グローバリゼーション、格差社会など新しい状況の中で生協の役割を考えることがここ何年かの一貫した課題であると思いますので、少しそれを振り返っておきます。これまでの総会シンポジウムなどで取り上げてきた「時代の危機」と言われる内容を、コミュニケーションの縮小・解体と表現し、この観点から「危機」という言葉の意味を探ってみました。日常生活のなかでコミュニケーション経路が縮小・解体したために、他人が見えない、ニーズが見えないといったことになってきているように思います。そのように見ると、昨年、一昨年の総会シンポジウムでの田中夏子先生や広島島の岡村秀信さんのお話は、すべて新しい関係づくり=新たなコミュニケーション・チャネルをつくる試みであったと言えるわけです。

では、なぜいまコミュニケーションが縮小しているのか、まずはその状況を見ておこうと思います。資料の新聞記事に見ますように、日本でゲーテッド・コミュニティというのが最近出来てきているようです。フェンスがあってゲートを開けないと入れない町です。つまり、「要塞都市」です。マンションでも、コミュニケーションをカットするすまい方が出てきていますが、それをさらに一歩進めて

町全体をフェンスで囲ってしまっているのです。アメリカでは2000万人もの人が、こうしたところに住んでいると言います。こうしたところに生協は入れるのでしょうか。岐阜市にも出来ていてJR岐阜駅から車で6分のところにマザービレッジというのがあるそうです。

他方で、隣人祭りという新しい関係づくりの取り組みも全国にひろがっているという記事もあります。記事によりますと、パリの区議会議員のアタナーズ・ペリファンさんが高齢者住民の孤独死をきっかけに、隣人で集まる機会をつくったことがその始まりだそうです。今は全世界29カ国に広がっているとされています。近隣関係の衰退とともに感情公害と呼ばれる現象が生まれていると言います。ご近所の騒音問題などで長い間、我慢していたために、ある日突然、怒りが抑制できなくて刃物で刺してしまうという事件が起きています。そこに日常生活におけるコミュニケーションが機能不全に陥っている構図があります。ニーズとして出てこないで、事件として発生してしまう。そこをどう変えていたらいいのかということのなかに組合員活動やNPOなどが増えている根拠があると思うのです。したがって、生協を初めとして、NPOなどは単にサービスを提供しているだけではないことを自覚しておくべきでしょう。

これらの現象が起こる背後に時代的な変化があると思うのです。要因を3つ上げておきました。第一に、大規模化と官僚制化によって組織構造そのものが専門化、細分化していくなかで、互いのこと、全体のことなどいろいろなことが見えなくなることがあると思います。第二に、歴史的な変化としての少子高齢社会。この変化過程において家族関係が一つの選択的な関係になりつつあります。家族関係は、要因の第三の新自由主義政策との関係でも言えるのですが、日本では家族が社会保障のベースになっています。それゆえ、研究者の岩田正美先生は家族から離れる層あるいは形成ができない層は現状で真っ先に貧困になっていくと指摘しています。単身者、高齢者単独世帯、母子世帯、それに低学歴層のニートなどです。さらに最近では50代の独身男性が増え、一人で生きていけなくなる層として出てきています。1990年代にはパラサイトシングルと言われて、家族の中でリッチに生きてきた若者層も、非正規社員から脱することができない層へと落ちていきます。

これまで家族、世帯というものは、生協の組織化の社会的基盤でした。つまり人びとにとって家族は社会に関わる動機になっていました。「家族のために」ということが、社会的な関わりの基盤になっていたのです。ところが、いまはそうした形で組み立てられない状況が、少子高齢社会の進展過程で出てきていると思うのです。そこで、今までとは違った動機が出て来るを得ません。その動機の一つが、社会的な貢献度とか、社会的なつながりのなかで自己表現するといったことになっているように思うのです。そうした動機が

大事にされ、組織化の原理として機能していくようにする必要がありますと思います。

例えば、配食サービスをやっている自主的グループに参加している80歳の一人暮らしの女性の例ですが、その活動を絶対に休まないというのです。この活動が彼女にとっての生活であり、自分の生を意義あるものとして組み立てる仕方なのだと思います。生活していく上での喜びなんですね。自分のためにボランティアを頑張る。そういうことが行動の動機になり始めています。それから、吉沢さんという人が本を書いています。確か90歳近くの年齢のかたではなかったと思いますが、その方が本の中で、ご主人が亡くなって毎回の食事をつくらなくなった。それだけでなく、生活そのものの規律を保てなくなったという趣旨のことを書いています。つまり家族がいてこそ食事を作るという無意識の行動が成立しているわけですが、家族がいなくなるとが大変なことになる。自分をどう保つか、生活をちゃんとしないといけなく、それには新しい関係をつくらないとやっていけなくなる。そうしたことが、新しい社会の組織化の原理になるのではないかと思うわけです。

人とつきあうことが欲求となり、新しい消費欲求のあり方が出てくるとすれば、人が育つ、人が育てられるための組合員活動を展開することが大切になってくると思います。

新自由主義の市場原理主義の中で自己責任論が強調され、自分の生活の困難や不幸は自分のせいだと思っている人が多いようです。どうやってそのような考えから人を引き出すかが大事だと思うのですが、その活動は生協をはじめとする協同組合の組合員活動が先端を行っているような気がします。それをさらにどう発展させるのか、この点は生協の事業の端っこの問題ではなく、現代の本質的な問題だと思います。組合員がこんなことをしたいと思ったとき、つまり自己表現の欲求が生まれたとき、それをどこかにつなげていく仕組みを組織構造としてもてる工夫が新たな課題になるのではないのでしょうか。それが地域社会における、そしてそこで生協が共益組織から公益組織へ転換していくコミュニケーション・チャンネルの開拓ではないかと思います。



質疑討論 (フローアとの質疑応答を編集部のと約で紹介しす。)

八田 淳 さん(めいきん生協理事)



イギリスでのフェアトレード取り組みなど、すばらしい考え方であり、ここ10年くらいで広がっているようですが、それは買う人の理解があつて可能になると思ひます。では、日本でも可能なのか、受け入れる素地はあるのかについてご意見を伺ひたい。?

碓井 崧 先生(金沢大学名誉教授)



協同組合の勉強を昔少し、したのですが、今日はお話しにいろいろ刺激されました。うかがひたいことは、ロッヂデールの時代は、地域社会があることを前提にした世界であつたといえるでしょうが、現代は個人化した世界に、私たちすすんでいと思ひます。ロハスといつた健康・持続可能志向のひろがりがあり、家族のためといつた考え方、価値観は変わつていて、老人の孤独死といつたことも個人化のあらわれと言えらうでしょう。こうした個人主義と連帯主義のはざまで、どうすすめていつたらいいかではないかと思ひておりますが、いかがでしょう。

向井清史先生(名古屋市立大学)



杉本先生にお尋ねしたいのですが、イギリスの生協で急速な変化が可能であつたのは、日本の協同組合との制度的な違い、意思決定の仕方の違いなどがあうのでしょうか。事業形態の変化への対応や資本集積の方法など、日本の協同組合とイギリスの協同組合のフレームの差異が、イギリス

での反転の背景にあるのでしょうか。

赤坂暢穂先生(中京大学)



大学生協にかかわつていま。組合員の参加は、大学か、地域にかかわりなく共通する問題だと思ひます。総代会や理事会での合意を得てすすめていますが、限られた時間であるとか、委任参加が少なくない総代会など、運営が形式的になっている点も、否めません。供給高を上げるための努力に傾いたり、「評価」も始まっていますが、評価されていることと内部の実態とのギャップを感じます。市町村合併などで、規模は大きくなつたものの、同じサービスが利用できなくなつてい地域もあります。そんな現状をどう考えたらいいでしょう。

(回答)

杉本貴志先生

イギリスと日本でのフェアトレードに関する違いというのは、それ自体大きな研究テーマだと思ひますので、十分お答えになりませんが、半分冗談、半分本気としてお聴

きください。日本でのフェアトレードは、生産者の再生産を保障し、日本がバナナを輸入しなくても自立できるだけの取引をめざすといつた理念があるため、高いバナナを買い支えるようなことになつて、熱心な組合員でないと取組めないようになっていのではないのでしょうか。イギリスでは、バナナも普通のものが200円であれば、せいぜい1~2割程度の高さです。あんなものはフェアトレードではないとか、自己満足ではないかといつた批判もあるかと思ひますが、その“いい加減さ”のような部分が、広がりを作つていのも事実です。

組合の意志決定も、日本の組合員は非常に熱心ですが、イギリスも昔は組合員の参加もあつて簡単には進みませんでした。しかし組織の巨大化のなかでマネジメントの難しさも増し、経営者が素早く意思決定するといつたことになつていといつていいでしょう。協同組合ですから、一人一票制は同じですが、強力なリーダーがいてすすめていといつたことかと思ひます。制度的には、日本は員外利用をはじめ、厳格な規制があつて、がんじがらめになつていといえませんが、イギリスでは法的規制は弱く、わりと自由な運営が行われており、生協が企業買収する場合に、日本の公正取引委員会にあたる機関が、公正取引の視点から規制するといつたことになつていいます。

八木憲一郎さん

お話しをうかがひながら、いま“生協とはなんぞや”を考へることが大事だといつた気持ちをつよくしてあります。考へることを通し、理念、原則と実践との矛盾を埋めていくこと必要だと思ひます。先日、名古屋ボストン美術館でゴーギャン展を觀てきましたが、“私たちは どこから来たのか 私たちは何者か 私たちはどこへ行くのか”といつたタイトルの絵がありました。生協も、いまこつたことを議論する価値があるなと思ひましたので、最後に少しご紹介させていだきました。

小木曾洋司先生

生協だけでなく、社会がどこへ行くのかが問われていのだと思ひます。ここ3年くらい、研究センターにかかわつて“つながり”と言つたことを考へてきましたが、ひとつの基盤だと思ひますし、協同組合の存在意義にかかわるよう思ひます。それにしましても、若い人たちの参加をどうしたらいいか、あらためて考へないといけなひですね。地域でがんばつてると、若い人も参加してくるといつたことがあるよう、こつた契機をつくることの大切さを考へていければと思ひます。

コーディネーター 向井 忍

今日のテーマは、歴史を振り返り、未来を考へるためにも、協同組合の原点を問うことの大切さが確認できたよう思ひます。来年は地域と協同の研究センターも設立15周年、法人化10年を迎えますので、医療生協や大学生協、農協、労協のみなさんとともに、レイドロウの「西暦2000年の協同組合」など改めて考へる機会がもてればと思ひております。杉本先生、八木さん、小木曾先生に感謝申し上げ、シンポジウムを閉じたいと思ひます。

各地からの
発信

コープみえエコファミリーの活動

生活協同組合コープみえ

商品・組合員活動推進課 浦北 豊

各地で相次ぐ、この夏の異常気象、もうこれ以上言わなくても皆さまは、私よりもずっとご存じだと思いますので、地球温暖化についてのお話はしませんね。それより、私どもコープみえの組合員が暮らしのなかで工夫しておこなっている地球温暖化防止の活動からの声と、この夏、組合員とともに体験したフィールドワークを少しご紹介します。

<『コープみえエコファミリーの活動』とは>

地球温暖化を防止しようと各自が各家庭で行う地球温暖化防止につながる活動に実施したらポイントをつけて、ポイントが貯まると景品と交換しますという活動です。

<コープみえエコファミリーの参加方法>

コープみえの「コープみえエコファミリー」に登録します。607名(09年8月1日現在)

<どんな活動にポイントが付くのでしょうか?> 例えば

昨年同月の電気使用量よりも減らした / レジ袋持参、水筒を持ち歩く(ペットボトルの飲料を買わない)、アイドリングストップなど / グリーン購入(地産地消の物、環境商品、電気製品eマーク4つ以上、太陽光発電の設置など) / 環境団体への加入、地域や市民団体の環境イベントや活動に参加 / 1か月のガソリン・もしくは軽油の使用量をつける / 生協から提示される毎月の環境課題を行う(キャンドルナイト実施、テレビは1日2時間まで、グリーンカーテンを作ろう、サマータイム制を実施して夜は早く寝よう、車に乗らない1週間など) / エコ生活術のご提案

<組合員さんがおこなった活動報告から>

ー『1日2時間以上テレビをつけない』の報告ー

☆コレが一番大変ですね。小さい頃からテレビがある生活だったのでテレビをついつけてしまったりで7日間、2時間以内ですぐすのに1か月程かかってしまいました。テレビの音って、ないとすごく静かでなんかさみし〜って気分にもなりました。主人がいる朝は2時間、昼間は昼ドラを見るので2時、夕方4時から子ども番組をつけてその後主人が帰宅したらつけっぱなし。これを朝は、30分、昼はがまん、夜は見たい番組1時間で7日間なんとか乗り切りました。旦那と長男にブーブー言われつつ「エコ生活やでな〜。」と言いながら大変でしたが、電気のない地域では「当然、音のないくらしなんやな〜。」と思いました。
☆子ども達も初めは「テレビ見たい!」と言っていました、私がコンセントを抜いてしまい「テレビこわれた。」と言うとテレビのことはすっかり忘れて他のことで遊んでいました。意外と平気なんだなあと思いました。

ー『トイレの便座の電気を消しましょう』の報告ー

☆暑い季節はうちも電気を切ってますが、今年は4月半ばから切って便座シートを使いました。家族のだれ一人文句も出なかったのが来年も4月くらいからやってみたいです。
☆我が家では、1年中、便座の電気は切ってあります。カバーを秋冬は厚地にし、便座の冷たさをしのいでいます。でも、決してガマンしてはなく十分快適ですよ。
☆これは意外と難しかったです。夏は、ずっと消してあるのですが、まだ、この時期は必要でつついっつ消すのを忘れてしまいます。でも、トイレに張紙をし7日間は実行できました。
☆慣れるまでなかなかでしたが、慣れてしまえば、そんなに苦になりませんでした。

<この夏のコープみえの活動から1つ紹介します。>

山に川にそして海にと美しい自然がいっぱいの三重県のフィールドを楽しみながらその自然のすばらしさを実感する中で、地球温暖化ストップに向けて学ぼうという企画です。今回は、その中の干潟の探検の様子をご紹介します。

海のフィールドワーク 松名瀬干潟の探検(松阪市) 7/24

松名瀬海岸は、松阪市の櫛田川の河口に広がる、春は潮干狩り夏は海水浴で市民が楽しむ大きな干潟です。海に面した表干潟と川側の裏干潟があり、たくさんの生物や植物が生息しています。また、はまぼう(半マングローブ)の群落(百数十株)もあります。ほんの少し場所を変えるだけで、生き物の種類や様子も変わり、干潟の不思議な生態系の世界を実感できます。帰りにはゴミ拾いも行いましたよ!

ーこれ以外のこの夏の環境の活動はー

カヌー体験と水生生物調べ(度会郡)、里山フィールドワーク 夏の虫探し(津市)、海のフィールドワーク 磯の探検(松阪市)、下水道公社 松阪浄水場見学(松阪市)、左官体験(四日市)、キャンドルナイト ベルファーム(松阪市)



<干潟の生物を探しています>



<はまぼう(マングローブ)の森を探索中>

各地からの
発信

夏休みコープ小幡 寺子屋 '09

めいきん生協小幡店
店長 岩本 隆憲

小学生のいるパートさんに、夏休みも休まず就業していただくにはどうしたらいいか？そんな雑談をきっかけとして昨年の夏から小幡店のコープ寺子屋が始まりました。宿題の面倒を見ていただける方を募集したところ、好意的にお絵かきや習字、工作の協力者が見つかり、「親子料理教室」と「宿題のお手伝い」をテーマに全部で8回の一日教室を企画しました。

今年のコープ寺子屋はその構想段階では、お店の2階を有効に活用して地域の子供とそこご家族の夏休みの生活に何かお役立ちできないか…。夏休み限定で、大人も子供も一緒になって学び合い、教え合う現代版の寺子屋のような役割を果たせないものか…。そんな思いを持ってお店に関わりやつながりのある皆さんに呼びかけました。その結果、今年6月の「09寺子屋実行委員会」に予想以上の皆さんが集まり、結果的に20企画に及ぶコープ寺子屋一日教室が生れたのです。開催に際して2階の利用サークル・教室の関係者をはじめ、地元町内会や老人会、民生委員さんなどの地域住民組織、そして医療生協や知的障害者の作業所などの提携団体、さらに生協の住宅事業部をはじめとする生活サービス部門の強力な後押しもありました。

町内会や老人会はまだ会長個人のレベルの関わりにとどまっていますが、あくまで将来の可能性として、教育委員会の後援が得られ、学校・保育園をはじめとする行政との連携や、町内会組織や学童保育所などが年間行事に位置づけと一緒に共同開催できたなら、コープの2階は地域の皆さん主体の共同の子育てや交流の場となり、文字どおりの現代版寺子屋を再現できるかもしれません。

実行委員会に先立ち、お店の現場職員も「地域の皆さんの楽しい夏休みをプロデュース」するスタンスで実行委員を選び、店舗委員さんと一緒にイメージやアイデアを創り膨らませました。さらに2階を利用されている15のサークル・教室の皆さんとも一緒に相談したことで内容が膨らみ、地域のつながりに依拠して地域の皆さんに話し合いに加わっていただいたことで一歩も二歩も地域の活動へと広がりを見せていったのです。



地元守山区の住まいの事業部提携業者の協力で実現。素敵なお箱にみんな感激！

コープ寺子屋は現在進行中ですが、毎回の教室から新しいつながりがたくさん生まれています。ケーブルテレビの取材もありましたが、逆に生

協全体でもっとクローズアップし、組合員に向けて内容の発信をすれば、ここから生まれた地域の中での生活・協同の意味への組合員さんの関心が広がっていく可能性を感じています。生協のお店は地域に根付き、その中で積み上げていく関係性が命だと思います。ひとつの地域で生まれたこのささやかな挑戦を生協組織全体がどうサポートし、支援していくのか？現場から生まれた主体的で人間的な努力を、27万人組合員を有する組織力につなげていくこと。それによって小さなお店にも活動と事業の相乗効果が生み出されていくのではないのでしょうか？

「組合員の声を大事に…」というとき、その組合員が暮らす地域でコープのお店が地域のくらしとどう向き合い、つながっていくのか？その意味が見落とされている気がしてなりません。チラシを置いてほしいと出向いたスイミングスクールから、企画協力者の紹介をいただいたり(昆虫を趣味にしている人)、町内会の紹介でかわりのなかった企業の協力を得られたり(印刷会社がペーパークラブ)、驚いたことに伝承遊び当日には学区の民生委員さん10人全員参加され非常に心強いものを感じました。

萌芽的ではありますが、地域に役立つことをご一緒に相談し、共同で開催していく関係性からは、水平的な不思議なつながる力が働くようです。もともと、生協の中にあり、今なお潜在的に生協が有している関係性ではないのでしょうか？地域の人間関係が希薄になっている今日、生協の中にあつた関係性を、地域の中の多様な人々とともに再生することは、逆に地域から求められ期待されていることのようにも感じます。そういう視点で考えたとき、女性の組織、生活者(消費者)組織には横に広がっていく潜在力や気づき、感性に満ち満ちています。寺子屋の取組みを通して、あらためてめいきん生協にはネットワークすればまだまだ多様に広がる協同が眠っていると実感しています。



3つのサークルの共催で手作り布ぞうり、エコフキン。マイはし袋を作りました

三河地域懇談会発

みんな、おいでん！ 奥三河へ

三河地域懇談会は第6回目を迎え、いよいよ、山で開催します。

三河と一言で言っても、海あり、山あり、川あり、里あり。三河の地域にもさまざまな暮らしがあります。今まで、豊橋・蒲郡・安城・岡崎で懇談会を開催してきました。食と農、福祉にテーマを絞って開催したこともあります。

今回は、「山の暮らし」そのものがテーマ。豊かな自然の中で人と人とのつながりをはぐくんでいる奥三河の暮らしに学びます。実行委員6人で、その企画の下見に現地を訪れました。その報告を、本番の三河地域懇談会に先駆けてみなさんにお届けします。



◆◆ 千枚田 ◆◆

千枚田をご存じですか。新城(旧鳳来町)の四谷にある棚田は、そのあぜや石垣によって大雨の際の土壌浸食を防ぎ、またその保水機能によって調整池の役割を果たし、水が一気に流水するのを押さえる災害防止機能を備えています。昔の人は、重労働に耐えながら手作業で急峻な山肌を開墾してきました。階段状の見事な田んぼは、石積みでできています。鞍掛山の中腹からこんこんと湧き出る水は、毎秒20リットルで涸れることもないそうです。標高差は210mにもなります。田は実は1296枚あって、22戸の農家が稲作を行っています。保存会の人たちががんばっていて、全国棚田サミットが2005年に開催されました。山には山のよさがあり、豊かな自然に囲まれたあたたかい人たちの協同があります。しかし、山には山の悩みもあって、過疎化や高齢化に伴う悩みは深刻です。

ところで、めいきん生協とみかわ市民生協との合併が来年の春には予定されています。静岡と長野との県境に住むみかわの組合員からは、「もう共同購入にきてもらえないのではないか」という心配の声もあがっているそうです。「そんなことは絶対にない」との説明がされていますが、お店もないようなところで生協の共同購入をライフラインとして待っている人たちのことをぜひ多くの人に知ってもらいたいものです。

◆◆ 廃校になった小学校で・・・ ◆◆

北設楽郡東栄町は、児童数が減り小学校も統合されて減っている地域です。その廃校になった粟代小学校の管理をしながら、ユニークな活動をしているのは、元めいきん生協職員の加藤彰男さんです。奥さんは今はみかわ市民生協の共同購入のサポーターをしています。粟代小学校は百年以上続いた伝統のある小学校で、校庭には「ふるさとに学び、ふるさとに生きる」という石碑があり、長い間、全校あげて愛鳥活動にも意欲的に取り組んでこられました。

文化施設の少ないなかでは小学校は、重要な文化の拠点になります。今も粟代小学校を加藤さんが管理してくれているおかげで、地元の方々のサークル活動などにも活用されているそうです。夏は、名古屋から学童保育などのグループが自然体験にやってきます。川で遊んだり、農業体験をしたり、ドラム缶風呂を楽しむとのことです。

◆◆ 新城、東栄町へぜひ一緒に ◆◆

9月の三河地域懇談会には、オプション企画を準備しています。愛知県民の森に宿泊し、翌日、粟代山の学校や花祭り会館へも行く予定です。もちろん四谷千枚田も訪ね、地元の方のお話をお聞きし、遊歩道を歩きます。ふるさとを愛し、ふるさとでがんばる人たちのパワーをいただいて、これからの地域と協同について考え合うことができたらと準備をすすめています。

台風や地震が多いこの夏、自然との共生についても考えることが多いことと思います。生協や研究センターでは、農や食、環境、福祉などについてもさまざまな取り組みがありますが、それらのすべてを考えるのに、山の暮らしを学ぶことは役に立つのではないかと、実行委員会では話し合いを重ねてきました。

懇談会の基調講演は50年以上も営農指導に携わってこられ、東栄町の花祭り保存会の会長としても長年ご活躍されている尾林さんをお願いしました。鳳来で森の健康診断の活動に取り組んでおられる高橋さんや、粟代山の学校の加藤さんの報告も予定しています。

どうぞ、9月26日、27日には、三河地域懇談会にご参加ください。お待ち申し上げております。

「みんな、おいでん！ 奥三河へ。」

(文責 伊藤小友美)

INDEX

巻頭エッセー めいきん生協理事長 寺本康美	1
総会記念シンポジウム歴史に学び 協同組合の未来を拓く	
イギリスの生協の再生に学ぶ	2-7
協同組合の原点を探り学ぶみかわ市民生協八木憲一郎	7-9
お二人の講演と報告をうけて 常任理事小木曾洋司	9-10
質疑討論	11
コープみえエコファミリーの活動 浦北 豊	12
夏休みコープ小幡 寺子屋'09 店長 岩本隆憲	13
みんな、おいでん！ 奥三河へ	14

2009年 8月25日(偶数月25日発行)

定価200円

(税・送料込み。年会費には購読料が含まれています)
発行 特定非営利活動法人地域と協同の研究センター
代表理事 川崎直巳

〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39

TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315

E-mail AEL03416@nifty.com

HP <http://www.tiiki-kyodo.net/>